

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| |  |  | | --- | --- | | **「海と船の企画展」図録:風をとらえて** | [IMG_256](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/hyoshi.htm) （拡大画面：30KB） |   **目次**  [I. 平戸とアジア](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/001.htm)  [1. 元寇前後](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/001.htm)  [2. 倭寇](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/001.htm" \l "02)  [3. 勘合貿易](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/001.htm" \l "03)  [4. 王直（おうちょく）・鄭成功（ていせいこう）](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/001.htm" \l "04)  [5. 唐船貿易の長崎限定](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/001.htm" \l "05)    [II. 平戸とポルトガル](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/002.htm)  [1. ポルトガル貿易の概要](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/002.htm)  [2. 平戸におけるポルトガルとの貿易](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/002.htm" \l "02)  [3. ポルトガルが日本文化に与えた影響](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/002.htm" \l "03)    [III. 平戸とオランダ（およびイギリス）](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/003.htm)  [1. オランダとの交易](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/003.htm)  [2. イギリスとの交易](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/004.htm)    [IV. 絵図に見る平戸港の発展](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/004.htm" \l "02)    [V. 「鎖国」後の平戸（捕鯨・黒船出没）](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/004.htm" \l "03)  [1. 捕鯨](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/004.htm" \l "03)  [2. 黒船出没](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/004.htm" \l "04)    【参考】  [平戸の海外交流関係年表](https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00669/contents/004.htm" \l "05) |

|  |
| --- |
| **I. 平戸とアジア**  **1. 元寇前後**  　古代の平戸は、肥前国松浦郡庇羅（ひら）郷に属していました。876年（貞観18）、庇羅郷と値嘉郷（五島地方）をあわせて、値賀（ちか）島として肥前国からいったん独立しました。これは、対馬・壱岐と同様に海外と接する重要地域として、中央政府から認められとられた処置でした。しかし、間もなく廃止されています。廃止はされましたが、当地域が海外との交易・交流の主要な地域であることに変わりはありませんでした。  　ところで、「平戸」の地名は、『青方文書』（あおかたもんじょ）という古文書（こもんじょ）で、1183年（寿永2）の文書に確認できます。おそくとも平安時代末期には「平戸」の文字が使われていたと判断されます。しかし、現在平戸島全域をさすのではなく、平戸島北部に限られていたようです。また、『青方文書』には、「高麗船」・「宋船」が平戸港に入港していたことも記されています。日本と宋（中国）の貿易が盛んな時期でもあり、国際貿易港としての平戸港の様子が古文書に記されています。  　その後も、日宋貿易は盛んでした。平戸には中国と交易する船の寄港地であり、これらの船に乗って行き交う僧（禅僧）の平戸滞在の記事が見られます。その中で有名なものとして明庵栄西（みょうあんえいさい・1141－1215）がいます。栄西は日本臨済宗の開祖で、二度目の宋からの帰国にさいして平戸・古江湾に着船しています。  　中国との交易・貿易船の寄港地平月は、元を建国したフビライ（1215－1294）の二度にわたる日本征服計画（元寇）により大きな被害を受けたと考えられます。  　弘安の役（1281年）で元軍は、元に漂着した日本人からの情報をもとに、平戸島に目をつけ、博多攻略の起点とすることにしています。二度目の蒙古襲来は台風で失敗に終わりましたが、平戸近海に停泊していた船団は被害を免れ、将兵を救出に向かい本国に帰還しました。  　これら元寇に関する平戸の遺跡はよくわかっていません。しかし、現在平戸の最教寺というお寺にある「大渡（おおわたり）長者五輪搭」が、1300年前後に制作され関西から運ばれ建てられています。非常に貴重な石塔なのですが莫大な資金が必要と考えられ、元寇後、何らかの意味（供養塔など）をもって建てられた可能性が考えられています。    IMG_256  **「蒙古襲来絵詞」**  江戸時代後期の写し    **2. 倭寇**  　元寇後、倭寇の活動が盛んとなりました。九州・瀬戸内海にその拠点があったのですが、平戸もその一つとなりました。ところで倭寇の「倭」は、けっして「日本」とまったく同様の意味をもつものではありません。倭寇は「倭語」・「倭服」を用いることが海外の資料に見受けられますが、平戸やその他の海域に生きる人達の共通の言語、服装で「日本」の言葉・服装とまったく同じではありませんでした。  　倭寇の構成員である倭人の特徴は、なかば日本、なかば朝鮮、なかば中国といったあいまいなものでした。この倭人によって国境をまたぐ地域をつくりだし、あるときには平和的に、また、あるときは殺戮をともなう襲撃がおこなわれました。  　いずれにしても、朝鮮半島・中国大陸・東南アジア各地に倭寇があたえた被害は大きなものでした。この倭寇は鎌倉時代末期から室町時代にかけて活動しました。    **3. 勘合貿易**  　勘合（かんごう）貿易とは室町時代、勘合符（かんごうふ）を使用して行った公認の日本と明（中国）との貿易のことです。1404年（応永11）、室町幕府3代将軍足利義満のときに日本へ来た使節が勘合符などを持参しはじめられました。  　4代将軍足利義持に明との国交を断ちましたが、六代将軍足利義教（よしのり）の時に再開しました。  　平戸は勘合貿易において使用される遣明船（けんみんせん）の重要な寄港地となっています。地理的な面もあるのですが、もう一つ大事なこととして、硫黄（いおう）の平戸港での積み込みがありました。硫黄は、勘合貿易の主要な日本からの輸出品でした。この硫黄は主に鹿児島方面から調達され船で平戸に運ばれ、平戸港で積み込まれていたのです。  　また、この勘合貿易において平戸を中心に支配していた松浦（まつら）氏にも、貿易に介入する機会をつかむことができました。平戸松浦家21代、義（よろし・？－1470）は、当時守護大名・大寺院クラスでないと許されない遣明船の類船（正使が乗る一号船を本船といい、それ以外を類船といいます）を室町幕府より特別に許可されました。現在に伝わる資料を見てみると、六代将軍足利義教や、貿易事務をとりおこなった京都の寺院と深い関係をもっていたことを伺わせます。これから、特別な取り計らいを受けたようです。  　義（よろし）は、勘合貿易のみではなく、朝鮮と公の貿易である歳遣船（さいけんせん）を派遣したことが記録に残っています。  　義の時代から周辺一族との武力衝突がはじまりますが、それを支えた背景には、これら海外貿易の富があったと考えられます。  　勘合貿易はやがて、中国地方を支配した守護大名大内氏が実権をにぎりました。大内氏が滅びるまで勘合貿易は続きますが、平戸は依然として重要な寄港地でした。  　勘合貿易の主要輸出品は硫黄・刀剣・扇などで、主要輸入品は銅銭・生糸などでした。    IMG_257  **「松浦義画像」**  室町時代    **4. 王直（おうちょく）・鄭成功（ていせいこう）**  　明は公式貿易のみを認め、明国内の人民には独自の私貿易を認めない海禁（かいきん）政策をとっていました。しかし、明では経済が発達し商人達は密かに諸国との貿易をおこなっていました。この蜜貿易に対して、明政府は密貿易港の雙嶼（そうしょ）を攻撃し壊滅しました。この攻撃を受け逃れた密貿易商人に王直（？－1557）がいました。この王直はポルトガル人が種子島に漂着した逃れた密貿易商人に王直（？－1557）がいました。この王直はポルトガル人が種子島に漂着した1543年に、同船していて通訳をつとめたとされています。  　王直は1542年ごろ平戸に本拠をおき、以後、平戸は急速に発展しました。王直は部下二千人あまりの部下をもち、三百人を乗せる大船を平戸港にもっていたとされます。王直は倭寇でもありましたが、学識もあり、密貿易の調停者でもあったため、多くの密貿易船が平戸をめざし来航しました。古い記録では、平戸は当時「西のみやこ」と呼ばれていました。しかし、王直は1557年（弘治3）、明の計略にかかり捕縛され、後に処刑されました。  　王直亡きあとも、平戸には中国商人が居住し貿易活動に携わりました。その中に中国福建省出身の鄭芝龍（ていしりゅう）がいました。この鄭芝龍と平戸の女性の間に生まれたのが鄭成功（1624－1662）です。鄭芝龍はやがて明の招きで帰国し、鄭成功も幼少の時に父によばれ明にわたり、福建総兵の地位につきました。しかし、明が清（しん）に滅ぼされそうになると、配下の船団による貿易による経済力を背景に抵抗しつづけました。  　また、当時オランダにより実質的に支配されていた台湾を攻略し、清朝に対抗しようとするも熱病にかかり死亡しました。この鄭成功の話をもとに、近松門左衛門（1653－1724）は国姓爺合戦（こくせんやかっせん）を記しました。    IMG_258  **「バハン船の旗」**  安土桃山時代    **5. 唐船貿易の長崎限定**  　江戸時代になって、平戸には特に中国人商人が在住し、朱印船貿易などに活躍していたが、やがて貿易の制限を江戸幕府はとるようになってきました。それは、江戸幕府の権力を確立し、維持させていくのに必要だと考えたからです。これは、海外貿易・交易に大きく依存していた平戸港にとって大事件でした。1634年（寛永11）には中国人商人に対して、海外往来の制限が適用され、1635年（寛永12）には、平戸をはじめ各地に来航していた中国商船（唐船）の来航地が長崎港に限定されることになりました。  　当時、オランダ商館はまだ平戸に設置されていましたが、主要な貿易船であるジャンク船は、平戸港からその姿を消すこととなったのです。  　なお、平戸には唐人町が形成されていましたが、平戸港における唐人町は王直が唐風の屋敷をかまえたと伝わる幸橋（オランダ橋）西側の地区一帯にあったとされています。    IMG_259  **「在長崎日清貿易絵巻」**  江戸時代中期 |
| **II. 平戸とポルトガル**  **1. ポルトガル貿易の概要**  　13世紀の末、マルコポーロの『東方見聞録』によって黄金の国ジパングとして日本が紹介されてから、世界の目は東洋に集まりました。その後積極的に海外政策に着手したポルトガルはバスコ・ダ・ガマの喜望峰廻りインド進出を機にマレー半島、中国沿岸に基点を得ることに成功しました。  　そしてはじめて日本（種子島）の地を踏んだのが1543年（天文12）のことです。  　当時のポルトガル国王ドン・ジョアン3世は当初この極東地域を一種の辺境とみなし、香料の産出で有名なモルッカ諸島に主たる関心を注いでいたため、日本に来航するポルトガル船も私的商船でした。しかし政府は日本貿易を観察し、その利益が莫大であることに着目すると、それに誘発されて中国沿岸の寧波に根拠地を設け、日本貿易を大資本のもとに着手することにしたのです。  　ポルトガル人が日本貿易に参加するということは、中国人の商売敵になるものでしたが、たまたま状勢は変転しました。当時倭寇と称せられる日本人の暴力的海商（海賊）の活動が全盛期をむかえ、中国沿岸諸地方を盛んに破壊していたのです。その結果1550年代には中国人の日本渡航は停止され、日本人もまた海外に出るものが稀となり、ポルトガル人にとっては思いがけない好機が訪れました。彼らの日本貿易は、中国人に代わり中国産の生糸を日本に運び、日本の銀を中国に運ぶという「肩代わり貿易」で、幸運にもそれを独占することが出来たのです。ちなみに16世紀日本・ヨーロッパにおける金の銀に対する価値比率は10倍～15倍というのが相場でしたが、中国では特有の商慣行のせいもあって金・銀の価値にそれほど大きな差異はありませんでした。すなわち、日本で安く手に入れた銀は中国市場においてはね上がり、多額の利益をもたらしたというわけです。  　しかしポルトガルの独占貿易も永くは続きませんでした。なぜならば17世紀に入るとオランダ、イギリス、スペインが日本貿易に参入しようと、あらゆる手段を使い日本幕府に働きかけを行うようになります。それに加え徳川幕府のキリスト教禁止政策の中、ポルトガルは貿易とキリスト教の布教を切り離すことがでず、ますます不利な状況に陥りました。そして1637年島原においてキリスト教徒を主とした農民の一揆がおこると、益々幕府のキリスト教徒、及びポルトガル人に対する憎悪は高まり、結局1639年にポルトガル人の来航が禁止され、約97年間に及ぶ交流に終止符がうたれました。    **＊主な輸入品**　生糸、絹織物、びいどろ、白粉、陶器、麝香、鉛、砂糖  （輸入品のほとんどは中国、南洋の物資であり、ヨーロッパの品々は諸侯への贈答品としていました。）  **＊主な輸出品**　銀、小麦、漆器、船材  （日本からの積出しは銀が大半を占め、その船を「銀の船」とさえ云われたほどです。）    **2. 平戸におけるポルトガルとの貿易**  　中国人海商王直の手引きによりポルトガル船が初めて平戸に入港したのは1550年（天文19）ドワルテ・ダ・ガマの船でした。時の領主松浦隆信（道可）は中国貿易の経験により、外国貿易の有利なことを知っており、大いにこれを歓迎し、貿易と分離することの出来ないキリスト教の布教も認めました。宣教師フランシスコ・ザビエルの平戸布教もこのときです。1553年以後は毎年1隻から2隻のポルトガル船が来航し、1557年からはポルトガル政府の官許船が入港するようになると、やがて平戸には京都、堺の豪商はもとより、多くの商人が集まり「西の都」と呼ばれるほどの賑わいを見せました。  　しかし、領主松浦隆信はポルトガル船の入港は歓迎しましたが、かならずしもキリスト教に好意を抱いていたわけではなく、布教活動が盛んになると、そこに複雑な関係が生じるようになりました。宣教師の処遇で仏教徒との板ばさみになり、加えて1561年には言語不通が原因でポルトガル人と日本人の間に争いが起こり、ポルトガル船長以下十数名の死傷者をだす事件（宮ノ前事件）が生じました。その結果ポルトガル船は平戸を出て大村横瀬浦、福田港を経て長崎に移るに至りました。こうして平戸の対ポルトガル貿易は15年間で絶えることになりました。    IMG_256  **「松浦隆信（道可）画像」**  江戸時代後期の写し    　この間平戸における布教の信望は極めて厚く、ポルトガル船が平戸を去った後も信仰は衰えることがありませんでした。しかし1587年（天正15）豊臣秀吉のバテレン追放令に始まったキリスト教に対する弾圧は、江戸時代に入ると益々厳しさを増し、キリスト教徒は表面跡を絶ちひそかに潜伏切支丹として信仰を続けました。  　明治初年信仰の自由を許されてから、多くの潜伏切支丹はカトリック教会に属し自由の信仰に入りましたが、弾圧当時の永い伝統と風習を守り続ける信者は「カクレキリシタン」と呼ばれ平戸・生月地方には現存しています。    IMG_257  **「豊臣秀吉バテレン追放令」**  天正15年（1587）    **3. ポルトガルが日本文化に与えた影響**  　ポルトガル貿易は16世紀から17世紀にかけ、日本文化にも多くの影響を及ぼしました。その中で代表的なものが、科学（火薬式鉄砲・医学・航海技術）、教育（セミナリオ・コレジオ）、印刷技術、美術（教会建築技術・洋画・銅版画）、芸能風俗（オルガン・ヴィオラなどの楽器類、演劇）、食生活などです。その多くはイエズス会を中心としたポルトガル宣教師たちにより伝授されましたが、彼らにとって幾多の危険を冒し極東の地日本までも旅立たせたのは、やはりキリスト教の布教という情熱にほかならなかったのでしょう。  　最後に16世紀後期、いかにポルトガル風俗が日本中に浸透したかを物語るものとして、日本語化したポルトガル語を紹介いたします。    羅紗（らしゃ）　合羽（かっぱ）　襦袢（じゅばん）　弁柄縞（べんがらじま）　更紗（さらさ）　牛肉（わか）　マント　ビードロ　ビロウド　カルサン　石鹸（しゃぼん）　ビスケット　メリヤス　大平（ちゃるめら）　南瓜（ぼーぶら）　カステラ　フラスコ　パン　煙草　カナリヤ　金平糖（こんぺいとう）　ボーロ　釦（ぼたん）　カルタ    参考引用文献　日葡交渉史　松田毅一著  ポルトガルと日本　ジョアン・パウロ・オリヴェイラ・イ・コスタ著 |
| **III. 平戸とオランダ（およびイギリス）**  **1. オランダとの交易**  　オランダは古い時代ネーデルランドといい、スペインの領土でしたが、ネーデルランドの北部の人々は同盟を結び、スペインからの独立宣言をしました。  　当時オランダはポルトガルから東洋諸国の品物を買って、ヨーロッパの国々に転売する中継貿易を行っていました。スペイン国王はポルトガルも統治していましたので、報復としてリスボンの港への出入りを禁じました。  　このためオランダは大きな打撃を受けましたので、貿易会社を設立して、航路を開拓して、自ら東洋へ進出することにしました。  　1598年6月、デ・ホープ号（500トン）、デ・リーフデ号（300トン）、ヘット・ハローク号（320トン）、ヘット・トラウ号（220トン）、デ・ブライデ・ボートスカップ号（150トン）の5隻で編成された東洋向けの船隊がロッテルダムの港を出帆しました。  　はじめ、南アフリカの喜望峰を回って、東インドに向かう計画を立てましたが、途中変更して南アメリカのマゼラン海峡を経由することにしました。航海中暴風雨、伝染病や飢えなどの困難に遭い、その中のリーフデ号だけが太平洋を横断して、1600年（慶長5）4月に豊後国（大分県）臼杵湾にかろうじて漂着しました、ロッテルダムを出港して、実に18ヵ月ぶりのことでした。当初リーフデ号の乗組員は150名でしたが、生存者24名、歩行できる者はわずかで、漂着後6名が死亡しました。当時の航海の過酷さがしのばれます。生きのびた乗組員の中に、のちに徳川家康の外交顧問として活躍し、また平戸のオランダ、イギリス両商館の設置に尽力した、イギリス人航海士ウイリアム・アダムス（日本名三浦按針）がいました。    IMG_256  **「唐船之図」（オランダ船部分）**  江戸時代中期    　1605年、浦賀に止めていたリーフデ号船長ほか乗組員の帰国に際し、平戸松浦家第26代松浦鎮信（法印）は、この好機をのがさないようにと家康に請願して、海外渡航許可の朱印状を受け、船を仕立てて、平戸招致の手紙とともに彼らをオランダ商館のあるマレー半島のパタニに送還しました。1609年2月オランダ東インド会社は、日本に対し通商を開始する決定をし、デ・ローデ・レーウ・メット・パイレン号とフリフーン号の2隻を日本に向けて出帆するように命じました。同年6月パタニにおいて生糸・胡椒などを船積みし、同地を出港して、7月1日の夕刻平戸港外に到着しました。    IMG_257  **「松浦鎮信（法印）画像」**  安土桃山時代    　貿易を熱望していた鎮信（法印）は、船長以下の一行を大歓迎し、オランダ人が通商の許可を得るための便宜を与え、斡旋の労を惜しみませんでした。一行は駿府（現静岡県）の家康に謁見し、通商許可の朱印状を得て平戸に帰着しました。一行は直ちに停泊中のメット・パイレン号の船上において会議を開き、鎮信の好意に報いるために、商館を平戸に設置することに決定しました。  　早速フリフーン号のジャックス・スペックスを館長に、ほかに補助員数名と下僕を任命し、平戸の街の東端崎方に土蔵付き家屋1戸を借り受け商館にあて、パタニから積んできた生糸・胡椒などの物資を陸揚げし、商売を開始ました。  　同年10月用務を終え平戸港を出帆したメット・パイレン号は、パタニを経由して、翌年7月にアムステルダムに帰着し、東インド会社に日本貿易開始のいきさつを報告しました。この報告により会社は日本貿易を重要視して、好適商品の選定委員会を設置しました。  　第2代目平戸商館長ヘンドリック・ブルーワーは、1610年8月メット・パイレン号に乗り組み、丁子・胡椒などを積み込み、2ヵ年の歳月をかけて1612年8月平戸に入港しました。同航のハーゼウィント号も、パタニに寄港して生糸・織物・その他中国の物資を積み、平戸に入港しました。次第に商館の商品の在庫が豊富になったので、商館の建造物などの充実を図ることが必要になってきました。  　1613年藩主に願い出、近くの町家の住宅22戸を取り払い、住宅・倉庫を新築しました。1616年には、倉庫やその他を建て増し、新たに埠頭を築造しました。さらに、1618年には、商館に隣接する町家50戸以上を取り払い増築拡張しました。これには新しい広間、商務員の私室、2棟の倉庫、石造火薬庫、病室、塀・埠頭などの石造物などが建造されました。埠頭にはアーチ型門を造り、商館の東端石垣上にオランダ国旗が翻っていました。1637年、1639年には、貿易の進展充実にともない、膨大な商品の収納のために、大規模な石造倉庫が建造されました。平戸港の商館施設の不足を補うために、副港川内浦にも倉庫、埠頭などの施設が建造されました。川内浦では主に船体の修理や船乗りたちの休養にあてられました。平戸の商館は東洋各地の商館の中で、最も豪華であったといわれています。    IMG_258  **「オランダ船船首飾木像」**  17世紀    　商館施設の充実とともに、京都・堺・大坂・江戸など各地の商人たちとの直接取引を実行し、幕府や諸大名からも注文を受けるようになり、逐次販路を開拓していきました。  　1628年貿易をめぐりタイオワン事件がおこり、オランダ貿易は数年間中断しますが、解決後は以前に増して、順調に進展していきました。  　そして1639年、幕府がポルトガルとの交渉を断絶してからは、オランダは中国とならんで、日本貿易を独占するようになりました。平戸オランダ商館閉鎖直前貿易は最高に達し、莫大な利潤を上げ、当時アジアの商館の中で抜きん出た存在でした。特に平戸との交易時代を「平戸時代」と呼ぶほどでした。  　輸入品としては、中国の生糸、絹織物、ペルシャ・ロシアの皮革、羅紗、毛織物、木綿、麻織物、ビロード、鉄、鉛、錫、水銀、象牙、水牛角、鮫皮、磁器、ガラス器、南洋の丁子、胡椒、砂糖、蘇木、琥珀、伽羅、麝香、薬品、酒類、珍品としての眼鏡、時計、望遠鏡、ランプ、装飾品、ほかに印刷本、絵画、彫刻、馬、犬、小鳥などなど多岐にわたっていました。中でも生糸、絹織物、羅紗、鹿皮、砂糖、香辛料などは原価の倍額以上で売れるもので、需要が多く人気商品でした。  　輸出品としては金、銀、銅の地金、漆器、屏風、武器・武具、陶磁器、樟脳、米・麦などの食料品が主なものでした。  　大量の商品と数多くの乗組員を搭載した貿易船は大型帆船で、春季西南の貿易風に乗って来航し、秋季東北の季節風を利用して帰るのを常としました。  　平戸に来航したオランダ貿易船の数は、多いときは年間12隻、平均して年間8隻を数えました。貿易港が長崎出島に移転した後、最終的に年間1隻に限定されましたが、この数だけを見ても、いかに平戸が貿易で潤い、そして外国の人たちで賑わいを見せたかを、容易に想像することができるのです。  　平戸の歴代領主藩主はオランダとの貿易を奨励し、平戸の人々の温かな人情はオランダ人に深い好感を与えていました。が、幕府は島原の乱後再び平戸にも宗教にからんだ騒乱が起こることを恐れ、かつ海外貿易の利を外様大名である平戸松浦家に独占されることを嫌い、オランダ商館の取り壊しを命じ、1641年遂に長崎出島への貿易移転となり、「平戸時代」として栄えた一時代に、幕を下ろすことになったのです。    IMG_259  **「1700年オランダ製天球儀」** |
| **2. イギリスとの交易**  　イギリスは、1558年スペインの無敵艦隊を破って制海権を手にし、さらに1600年イギリス東インド会社を設立して、東洋貿易を積極化しました。オランダが喜望峰を回って東洋進出を果たし、ウイリアム・アダムスの尽力によりオランダ商館が日本の平戸に設置されたことを知り、東洋、中でも日本渡航の機会をうかがっていました。  　クローブ号を仕立て、イギリス国王の親書を携えたジョン・セーリスを司令官として、1613年6月ヨーロッパ諸国に遅れて、はじめて平戸に来航しました。干潮のため、港の沖合いに錨を下ろしたので、鎮信（法印）は孫の隆信（宗陽）とともに、40隻の舟で迎え、大いに歓迎しました。平戸滞在約50日の後、アダムスも江戸から来平したので、セーリスは同道東上して家康に謁見し、アダムスの力添えもあり、正式に通商の許可を得ました。  　幕府やアダムスは浦賀を貿易港にすることを強く望みましたが、セーリスは平戸にもどり、評議し平戸に商館を設置することを決定しました。今の石橋幸橋の西岸付近を選定し、中国泉州出身で、平戸居住の朱印貿易商李旦の持家を借り受けて多くの商品を収納し、商館にあてました。リチャード・コックスを館長に任命し、ウイリアム・アダムスほか約10名を置き、営業を開始しました。コックスは江戸・駿府・京都・堺・大坂・長崎に館員を派遣して販路の開拓や、商品取引の業務にあたらせ、他方中国や交趾（ベトナム）の商品の導入なども考慮しました。またアダムスを船長としてシャム（タイ）などに派遣して、日本人向きの生糸・絹織物・皮革・蘇木などの仕入れに努力しました。  　イギリスの貿易品は西洋より輸入されたものが多く、比較的高価なのに対し、オランダ商館は東南アジアより諸国の仲買品を入れ、ことさらに薄利多売を策し、日本人の気質に合う掛売りなども取り入れたので、財力的にもイギリスは次第にオランダに圧倒されることになりました。  　イギリスはオランダとの貿易商戦に敗れ、遂に平戸商館の閉鎖を決定しました。閉鎖の準備に着手し、従来の貸付金の回収をオランダ商館に委託し、再び来平の時に使用するため、商館の保管を平戸藩主に託して、1623年インドネシアのバタビアに向かって出港しました。イギリスの日本貿易はわずかに10年で幕をとじたのです。    **IV. 絵図にみる平戸港の発展**  　港のできる場所としては、大きく次の四つの条件があげられるといわれます。  （1）船の出入りの容易さ。（2）風波が避けられる地形であるかどうか。（3）内陸とのアクセスがいいかどうか。（4）大きな船がつけられる水深があるかどうか。  　この中で特に重要なものは（1）と（2）であるといいます。これを満たす地形とは、海が袋状に陸の中にはいりこんでいる状態をいいます。現在の平戸港は埋め立てが進行し、奥行きの感じられない港になっていまが、中心部の埋め立てが完成した1804年（文化元）までは、まさしく袋状に海が入り込んだ地形をしていました。正保年間（1644－1647）に作製された「正保平戸城下図」では、その地形がよくわかります。平戸港の江戸時代以前の様子はよくわかっていないのですが、おそらく、現在の平戸市街地の平坦な土地はほとんど埋め立てによって形成されたものではないかと思われます。    IMG_256  **「正保平戸城下図」**  正保年間（1644－47）    　ところで、平戸港は平戸瀬戸に面しています。潮の流れの早い瀬戸は海上交通において難所の点が強調されがちです。たしかに難所でもありますが、船の出入りの容易さからとらえると、一定時間に一定方向の潮の流れがあるのは、むしろ好条件にもなります。また、瀬戸の両側には陸地がせまり風波の影響から逃れやすくなるのも見逃せない点です。  　港のできる条件の（3）に「内陸とのアクセスがいいかどうか。」とありますが、平戸港ではこの条件はあてはまりません。しかし、これに代わる条件として、物資の積み替え・物資の結節点としての機能が平戸港にはありました。特に海外貿易時代は、この機能が十二分に平戸港は発揮されていました。  　平戸港（平戸城下）の様子を描いた最も古い絵図に、オランダ・ハーグ国立中央文書館蔵の「1621年平戸図」があります。建物は、洋風に描かれ正確に描いたものではないのですが、貴重な情報を伝えています。当時は平戸港に、オランダ商館・イギリス商館が設置されていて、日本、アジアおよびヨーロッパの人々が平戸に居住したまさしく海外貿易港として全盛の時代でもありました。この絵図には「FIRANDO」（フィランド）と平戸の呼称が記されます。この絵図より以前に描かれた世界地図にも同様に「FIRANDO」の文字が見られ、特にヨーロッパにおいても認知されていたようです。  　最後に（4）の「大きな船がつけられる水深があるかどうか。」についてですが、この点について平戸港はきびしい条件でした。これは中世までは、そこまで必要な条件ではありませんでした。しかし、近世になって船が大型化し、深い水深の港が必要になってきます。これはヨーロッパにおいても共通にいえることでした。  　平戸においてはオランダ商館が長崎出島に移転して以降、国内海運の大型船に対応するため水深の深い港の整備や、平戸瀬戸の航路整備がおこなわれました。    **V. 「鎖国」後の平戸（捕鯨・黒船出没）**  **1. 捕鯨**  　1641年（寛永18）、平戸オランダ商館が長崎出島に移転し、平戸に貿易船が来航しなくなると、平戸における経済状況は次第に悪くなっていきました。平戸藩もいろいろな政策を打ち出しますが、貿易時代のような活況をとりもどすことはできませんでした。  　そのような中、オランダ貿易時代からおこなわれていた捕鯨業を盛んにした鯨組に益富（ますとみ）組があります。平戸の西にある生月島に本拠をおき、1700年前半から捕鯨をはじめました。現在の長崎県から佐賀県海岸でおこなわれた捕鯨を西海捕鯨といいます。益富組はその中で最大規模の経営をおこないます。益富組は200隻以上の船と、三千人余りの人々を雇い、多い時で、年間200頭あまりの鯨を捕獲しています。この捕鯨による収入は莫大で捕鯨開始から廃業にいたるまで、平戸藩に対して納税額が約77万両、献金が約1万5千両、貸金が約24万両、合計100万両以上におよぶ莫大な金額をおさめています。    IMG_257  **「得庵本」**  江戸時代中期    　益富組の収入は大名に匹敵するものであったようです。その益富組は生月に本拠をおきましたが、平戸との関係は深く、平戸城下に広大な屋敷を平戸藩からあずかるなどその影響は大きかったと考えられます。  　江戸時代後期になると、アメリカ・ヨーロッパ諸国は捕鯨業を盛んにおこないました。アメリカをはじめ諸外国の捕鯨船が目本近海に進出し、鯨を捕獲し頭数が急速に減少していきました。それにともない益富組も影響を被り1861年（文久元）廃業することとなったのです。    **2. 黒船出没**  　1858年（安政五）、江戸幕府と諸外国の通商条約の調印以降、平戸近海へ黒船（外国艦船）が出現するようになりました。同年だけでも、平戸藩領近海に合計13回外国船が確認されています。また、1860年（万延元）には、平戸海峡を通過するにいたりました。こうした事態を受け、不測の事態に備えて平戸藩は平戸瀬戸に大砲を設置しました。  　しかし、「鎖国」体制のなかで、造船及び軍事力の差は諸外国との間で歴然としており、平戸瀬戸の台場に設置された大砲も実戦に使用されることはありませんでした。  　また、平戸藩は外国艦船への対応を通じて、近隣の藩との密接な関係を築くこととなり明治維新へむけての対応とつながっていくこととなりました。    ※掲載してある資料は、すべて松浦史料博物館の所蔵品である。    **◆平戸の海外交流関係年表◆**   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | | |  |  | | --- | --- | | **年** | **海外交流内容** | | 1183年 | 「平戸」の地名の初見 | | 1191年 | 栄西、平戸（古江湾）に宋より到着 | | 1235年 | 栄尊、円爾、平戸より商船にのり宋へわたる | | 1265年 | 建長寺二世兀庵普寧（ごったんふねい）、宋へ帰国の途中、平戸による | | 1271年 | 蒙古、元と称する（中国） | | 1274年 | 文永の役（蒙古襲来） | | 1281年 | 弘安の役（蒙古襲来）、平戸近海に元軍集結する | | 1350年 | 倭寇（「前期倭寇」）激増 | | 1368年 | 元、滅亡、明興る（中国） | | 1392年 | 高麗滅ぶ、朝鮮興る（朝鮮半島） | | 1407年 | 平戸島代官、金藤貞、朝鮮に使者をおくる | | 1452年 | 遣明船、平戸寄港、硫黄を積んだ薩摩船、遣明船のもとに来航 | | 1456年 | 松浦義、朝鮮と歳遣船を約す | | 1458年 | 松浦義、室町幕府から遣明船の類船を許可される | | 1486年 | 明からもどった遣明船、平戸に到着 | | 1498年 | ヴァスコ・ダ・ガマ、インドに達する | | 1534年 | イエズス会、設立 | | 1539年 | 遣明船、平戸寄港 | | 1542年 | 密貿易商人、王直このころ平戸に本拠をおく | | 1543年 | ポルトガル人、種子島漂着、鉄砲の伝来 | | 1549年 | フランシスコ・ザビエル、鹿児島に来る | | 1550年 | ポルトガル船、はじめて平戸に入港、ザビエル平戸に来る | | 1557年 | 王直、明で捕まる。ポルトガル、マカオの居住権を獲得 | | 1558年 | 1568年まで、倭寇、明沿岸、東南アジア各地に猛威をふるう | | 1561年 | 平戸港で宮の前事件発生、ポルトガル人多数殺害される | | 1564年 | 平戸にキリスト教の教会が建設される | | 1565年 | ポルトガル船、福田港（大村氏領）入港、平戸の兵船、福田港を襲撃する | | 1587年 | 豊臣秀吉、バテレン追放令を発令。日本人のソマ船、平戸よりルソンに渡海 | | 1588年 | イギリス、イスパニアの無敵艦隊を破る | | 1593年 | スペインのフィリピン長官使節、平戸に来航 | | 1600年 | リーフデ号、豊後に漂着。イギリス、東インド会社設立 | | 1602年 | 連合オランダ東インド会社（V・O・C）設立 | | 1604年 | 松浦鎮信、江戸幕府に朱印船を許可される | | 1605年 | リーフデ号船員を平戸より帰還させる | | 1609年 | オランダ船、平戸入港、商館を設置する | | 1613年 | イギリス船、平戸入港、商館を設置する | | 1616年 | オランダ・イギリス貿易を平戸と長崎に限定される | | 1619年 | 平戸のオランダ・イギリス同盟成立 | | 1620年 | ウィリアム・アダムズ平戸で没。鄭芝龍、平戸にくる | | 1623年 | イギリス商館、閉鎖される | | 1624年 | 鄭成功、平戸に生まれる | | 1635年 | 唐船貿易を長崎のみに限定される | | 1636年 | 長崎出島完成、ポルトガル人収容 | | 1637年 | 島原の乱おこる | | 1639年 | ポルトガル人、日本追放 | | 1640年 | 平戸オランダ商館の破壊を、幕府に命じられる | | 1641年 | 平戸オランダ商館の長崎出島への移転を命じられる | | 1648年 | 鄭成功、江戸幕府に明朝回復の援助をもとめる | | 1662年 | 鄭成功、台湾のオランダ軍排除、同年没 | | 1715年 | 近松門左衛門「国姓爺合戦」著す | | 1725年 | 益富組捕鯨をはじめる | | 1782年 | 平戸オランダ商館時代のオランダ船錨、海中より引き揚げられる | | 1799年 | 連合オランダ東インド会社解散 | | 1853年 | ペリー浦賀来航 | | 1860年 | 外国艦船、平戸瀬戸通過、平戸瀬戸に台場（砲台）設置 | | |